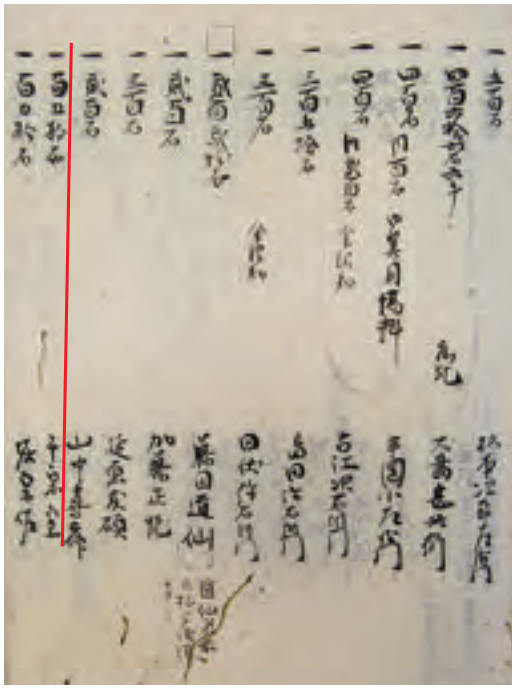
小松と茶道

小松における茶道の普及・興隆を考えた場合、小松城に隠居した前田利常が、慶安五年（承応元年　一六五二）、千利休の孫宗旦の四男である千宗室仙叟を茶堂として召抱えたことに起因する。このとき仙叟は三一歳で、小松城の三ノ丸に屋敷を賜り、二畳敷きの茶室を建てさせていただき、修理も仰せ付けられ、高麗茶碗と瀬戸丸壺を拝領した。翌承応二年（一六五三）の『小松侍帳』（『古組帳　抜萃一』）に「一、百五拾石千宗室」とあり、その知行高が知られる。

仙叟が利常に仕えて七年目の万治元年（一六五八）十月十二日、利常が小松城で六六歳の生涯を終え、また同年

「始祖長左衛門対仙叟居士像」〈仙叟の部分〉（個人蔵）



『古組帳　抜萃一』「承応弐年小松侍帳」（金沢市立玉川図書館所蔵）

（表）　（左側面）

竹茶杓　銘ヲソラク　仙叟作共筒（個人蔵）

十二月十九日、父宗旦が八一歳の大往生をした。

仙叟は利常に近仕するとともに、武士から町人まで茶の湯を広め、父宗旦から受け継いだ侘びの茶風の浸透に意を尽くした。

利常没後、仙叟は五代藩主前田綱紀に仕え、小松から金沢に移り、味噌蔵町に屋敷を賜り臘月庵を営み、元禄六年（一六九三）、老齢の七二歳で致仕し京都に戻ったが、この間、加賀と京都を頻繁に往復し、裏千家流茶道発展の基礎を築いた。

仙叟の高弟である金沢の浅野屋次郎兵衛浄全（号、臘月庵）が記した茶会記『臘月庵日記』に小松での茶会が貞享三年（一六八六）十月五日夜に瀧屋半兵衛の三畳半の茶室、十月六日に越前屋七郎右衛門の三畳半の茶室、同四年十月十一日朝には越前屋七郎右衛門の茶室と三回見える。瀧屋半兵衛は小松の有力町人の一人である。越前屋七郎右衛門は、泥町に住し町年寄も務め、歓生、また慶阿と号して俳諧や連歌をよくした文化人である。また仙叟が越前屋七郎右衛門に贈った「銘ヲソラク」の茶杓が現存する。

このように町人層にまで茶の湯が広まり、その交流の輪が金沢の町人が小松に訪ねてくるほど活発だったことが知られる。

今日、小松市内では多くの人々が茶道を嗜み、茶会も催されている。殊に平成九年（一九九七）、裏千家十五代鵬雲斎汎叟千玄室氏より、旧小松城三ノ丸にあたる芦城公園内に仙叟屋敷と茶室「玄庵」を小松市にご寄附いただき、茶道文化の拠点となっている。

（北春千代）

芦城公園に建つ茶室「玄庵」